

事業の背景・目的

・実績報告書（別紙 9 - 3）を基に、事業の背景や目的、必要性、地域における生物多様性保全上の課題等を簡潔に記載（300文字以内）

ニホンジカ、気候変動等、尾瀬の自然に対する新たな外圧が生じる中、65年前の第1次調査以降実施されていない尾瀬の現在の自然環境を把握するための基礎調査を実施し、尾瀬の現状を把握分析して、今後の保全に資することを目的とする。

事業の内容

- ①「生物相のインベントリー調査」 維管束植物、水生植物、コウモリ類、昆虫類、水生昆虫類及び水生昆虫類を中心とした昆虫相の現地調査を行った。
- ②「尾瀬ヶ原湿原と周辺山地の植生分布状態調査と環境との関連」 植生の単位と広がり把握するために植生調査と大中小の縮尺の植生図作成（暫定版）を行った。
- ③「ニホンジカによる植生への影響調査」 尾瀬ヶ原におけるニホンジカ侵入増による生物相への影響とその回復について調査・分析した。
- ④「長期広域モニタリングシステムの構築」 非破壊的モニタリング手法である衛星やUAV空撮画像による植生モニタリング法の開発を進めた。
- ⑤「社会科学的に見た尾瀬ヶ原の自然の価値」 環境社会学分野等からの社会・人間活動と自然環境の共生、自然資本の持続性についての調査研究を行った。
- ⑥「普及事業」 映像等を用い、尾瀬の自然をテーマとしたバーチャル・ミュージアムの企画・試作作成を進めた。

得られた成果

・実績報告書（別紙 9 - 3）を基に、事業の成果、活動継続の見通し、事業終了後の展開等を簡潔に記載（400文字以内）

- ・尾瀬の自然の変動調査を行い、60年間の生物相の変化を把握して、将来変動予測を進めた。
- ・絶滅危惧種・貴重種・重要種について詳細な調査を行うとともに、これまで尾瀬から記録がない、あるいは新たに侵入したと思われる植物相、動物相が多数確認できた。
- ・尾瀬生態系の持続的保全には、広域モニタリングによる湿原生態系の時空間的把握が不可欠であることから、長期モニタリング手法とその実施方法を検討するための現地調査と、ニホンジカの影響を軽減するための方策と連動したモニタリングシステムを検討する。
- ・学術調査の成果を研究者だけでなく、一般社会にも広く公開するため、バーチャル・ミュージアムとして取りまとめ、インターネットを通じて広く尾瀬の自然理解と社会還元を務める。